

函館の七夕

川村真弘

『竹に短冊 七夕祭り 大いに祝おう ろうそく1本 ちょうだいな』
という歌詞に、独特な節回しの付いた歌が故郷、函館にある。しかも、
故郷の七夕には不思議な風習もあるのだ。

七夕の夜を迎えるには、まだ明るい午後。学校を飛び出すように帰宅した僕は、夢中になって提灯づくりに励む。たいていは赤ちゃんの飲むミルク缶を材料にする。直径20cm程の円柱型鉄缶に、釘を打ち込んで抜き、次々に穴を開ける。それが終わったら、適当な塩梅で缶2カ所に針金を結び、そこに長めの棒を通す。これでオリジナル提灯のできあがりだ。缶の中にろうそくを立て、火を灯せば、穴は光の出口となる。

さて、夜。私の家に集合した友人数名は、昼間作った提灯に火を灯し、片っ端から家々を訪問し、戸口に立っては冒頭歌を合唱する。やがて、歌い終わると家人が戸口から出てきて、「ご苦労様」と労ってくれた後、ろうそくを数本ずつ子どもたちに手渡してくれる。中にはお菓子をくれる家もある。この夜は、この歌さえあれば、子どもたちは見ず知らずのどの家を訪ねてもよいのだ。今でも鮮明に思い出す故郷の行事だ。